

1. コラム「論点提起」：気象・気候変動レジリエンスに取り組めるや如何

東日本大震災以降、大規模自然災害が「広域化・激甚化・頻発化」と表現されるようになり、「国土強靱化」（ナショナル・レジリエンス）が謳われるようになった。地震－津波－原発事故というシビアな「複合連鎖災害」も認識され、「活断層」の存在が従来以上に議論されるようになった。そして、2024年8月8日には、「南海トラフ地震臨時情報『巨大地震注意』」が出された。

こうした地球内部の動きの一方で、日本の気象（短期）・気候（長期）変動を体感する事象も増えている。かつてはあまり聞かれなかった用語が増えている。いつからか、雨量が「100mm」を超える事象が増え、その原因事象の「ゲリラ豪雨」「線状降水帯」が定着した。最近では、「ダウンバースト」「瞬間停電」「モンスーンジャイア」も聞くようになった。日本が「亜熱帯化」している。

気象・気候変動は、日本列島の生態・生物環境にも変化をもたらし、海水温の上昇は水産物の生育・漁獲地の移動・変動をもたらしている。北海道産の米の評価が上がっているなど、各地の特産品が変わる兆しを見せている。東北地域が中心であったと云われる縄文時代の気候を想起する。深山（餌場）の環境が変化し、里山放棄（緩衝帯）とも相まって、鳥獣が人里・まち中に出没する。

当然、家の建て方、住まい方、人の暮らし方等、風土にも影響が出る。地震の多発は、飛ばない重い屋根から、揺れには強い軽い屋根へと変化させたが、台風には逆に作用する（飛ばされる）。また、元々、高温多湿の日本においては、「いかに夏を快適に過ごすか」に重点がおかれ、家の軒・庇で日を遮り、窓は開放型であった。そこに、日米構造会議（1989-1990）におけるアメリカ側の要求の一環で、簡単に建てられる米国方式の2X4（ツーバイフォー）工法が導入されたことに伴い、軒・庇はなくなり、家は気密型になり、家づくりが変わった。固いがしなやかさはない。

当然ながら、日本在来の伝統的工法の技術を有する職人（大工等）の衰退の始まりでもあった。一般住宅にも空調システムが導入されると、当然ながら、まち空間・都市空間は熱くなる。道路や敷地の表面もコンクリート・アスファルト舗装されると輻射熱が貯まり、空間全体が熱くなる。

こうした中、「涼める道」「日陰マップ」をガイドするアプリやマップを紹介する1篇のレポート <https://tinyurl.com/26lrw4mk> が目に止まった。ハッとさせられた。これは、かつての日本が庇・軒、木陰/緑陰があった日本の風景ではなかったのだろうか。風の抜ける庭・家、通り、海風・山風を感じられるまち空間等。元々あった道路沿いの街路樹があとから張られる電線やケーブル等の邪魔ということで伐採され、まち中の樹木（群）が民地内だからといって伐採自由（神宮外苑再開発等）、建ぺい率を緩和して樹木の1本も植えられないような密な建て方の分譲住宅地等々を今一度、気象・気候変動に適応（レジリエント：含む防災）する家・ビルの建て方、まち・都市空間づくり、社会インフラづくりに目を向ける必要があるのではなかろうか。自然との関係をあまり感じられないコンパクトシティ、スマートシティ概念で良いのだろうか。避難できない避難計画を是認した施設立地でいいのだろうか。山の斜面を切り開いた太陽光発電が本当にエコなのか。

見せかけのSDGsウォッシュではなく、真の「気象・気候変動レジリエンス」に取り組めるや如何。